

彙 報

会 長 上 野 善 道

2006年度第2回常任委員会

日 時：2006年10月15日（日）12:00～17:30

場 所：東京大学文学部3号館6階言語学研究室

出席者：上野善道(会長)，林 徹(事務局長)，風間伸次郎，菊地康人，窪菌晴夫，田窪行則，早津恵美子

オブザーバー：影山太郎(編集委員長)，樋口康一(大会運営委員長)，郡司隆男(広報委員長)，梅谷博之(事務局長補佐)

[報告事項]

- (1) 第133回大会の準備状況について
 - ・第133回大会（2006年度秋季大会・於札幌学院大学）の準備状況について大会運営委員長から報告があった。
 - ・この大会より、公開講演については予稿集原稿を最大14ページまで認めることが会長から報告された。
- (2) 第134回大会について
 - ・メーリングリストでの検討を経て、第134回大会（2007年度春季大会）が6月16日、17日に麗澤大学で開催されることが決定し、その旨報告された。
 - ・これまで土曜日に行なわれていたシンポジウムと総会を日曜日に開催すること、また、日曜日に行なわれていた研究発表を土曜日に開催することが報告された。
- (3) 第135回大会について

メーリングリストでの検討を経て、第135回大会（2007年度秋季大会）が11月24日、25日に信州大学で開催されることが決定し、その旨報告された。
- (4) 今年度の夏期講座について

2006年度夏期講座について、風間委員（夏期講座実行委員長および夏期講座小委員会委員）から報告があった。
- (5) 独立行政法人科学技術振興機構のアーカイブ化に関するヒアリングと電子ジャーナル化について

同機構より言語学会に届いた『言語研究』のアーカイブ化に関するヒアリングシートについて、及び、同機構の電子ジャーナル出版支援システム（J-STAGE）について、広報委員長より説明があった。また、アーカイブ化と J-STAGE を利用するにあたり、著作権者から許諾を求める方法を審議する必要があること、及び、著作物取り扱い規程を作る必要があることが同じく広報委員長より指摘された。審議事項（1）及び（2）を参照。

- （6）「危機言語」小委員会編集の出版物について
『世界危機言語データブック』が「危機言語」小委員会より出版される予定であることが報告された。

[審議事項]

- （1）アーカイブ化について
『言語研究』アーカイブ化の対象年度および対象記事について審議した。審議の結果、対象年度を創刊号から2005年度までとすること、認証を掛けないこと、公開するのは論文及びそれに順ずる記事とすることを了承した。
- （2）著作物取り扱い規程と著者への周知・許諾のとり方について
- ・アーカイブ化に伴う著作物の取り扱いについて審議し「日本語学会著作物取り扱い規程」の原案を作成した。
 - ・著作物取り扱い規程の周知とその遡及適用の許諾のとり方について審議した。ホームページや文書による周知を行なって2007年2月末日まで異議を受け付け、異議が出なかった論文について公開する案をまとめた。
- （3）『言語研究』の体裁について
編集委員長から、『言語研究』を読みやすく手に取りたくなるような魅力あるものにするため判型、誌面、表紙を改良したいという提案があり、どのように改良する余地があるか意見交換した後、具体案を編集委員会と会長、事務局長で詰めることにした。
- （4）『言語研究』の電子ジャーナル化について
2006年度以降刊行される『言語研究』を電子ジャーナル化することになった場合のメリットとデメリットについて意見交換した。本件に関する検討を引き続き広報委員会に依頼することにした。
- （5）第136回以降の大会について
第136回大会（2008年度春季大会）以降の会場候補校について意見交換を行なった。

- (6) 大会発表申し込み手続き, および大会ポスターについて
大会発表申し込み手続き, ポスター及びプログラムの体裁について改良すべき点を検討した. 今後の検討は大会運営委員会に依頼することにした.
- (7) その他
現在『言語研究』掲載の論文には, 邦文論文には欧文要旨が, 欧文論文には邦文要旨が付されている. しかし, 特にホームページ閲覧者にとっては邦文論文の要旨は邦文で, 欧文論文の要旨は欧文であったほうが利便性が高いことが, 編集委員長から指摘された. これに関して意見交換を行ない, 今後の検討を編集委員会に依頼することにした.

2006年度第2回委員会

日 時: 2006年11月18日(土) 10:30~12:45

場 所: 札幌学院大学 G館5階 特別会議室(G-504)

出席者: 上野善道(会長), 林 徹(事務局長), 井上 優, 上山あゆみ, 荻野綱男, 影山太郎, 風間伸次郎, 梶 茂樹, 加藤重広, 久保智之, 窪園晴夫, 熊本 裕, 呉人 恵, 郡司隆男, 小泉政利, 坂原 茂, 坂本比奈子, 清水克正, 杉浦滋子, 角田太作, 津曲敏郎, 中川 裕(千葉大学), 西山佑司, 野田尚史, 早津恵美子, 藤代 節, 益岡隆志, 戴司郎, 吉田 豊(以上29名)

委任状: 31名

オブザーバー: 佐々木冠(第133回大会実行委員長), 滝浦真人(第134回大会実行委員長), 佐藤昭裕(会計監査委員), 吉田和彦(会計監査委員), 梅谷博之(事務局長補佐)

[報告事項]

- (1) 第133回大会(2006年度秋季大会, 札幌学院大学)について
- 大会実行委員長の佐々木冠氏より挨拶があった.
 - 採択状況が報告され, 口頭発表は64件中44件, ポスター発表は5件中4件が採択された. なおワークショップは応募がなかった.
 - この大会より, 公開講演については予稿集原稿を最大で14ページまで認めることが会長より報告された.
- (2) 2007年度の大会について
- 第134回大会(春季大会)は2007年6月16日, 17日に麗澤大学で開催される. 実行委員長は滝浦真人氏に依頼することが報告され, 滝浦氏より挨拶があった.

- 第 134 回大会ではプログラムが従来と異なる。シンポジウムと総会を日曜日に、研究発表を土曜日に開催することになった。
 - 第 135 回大会（秋季大会）は 2007 年 11 月 24 日、25 日に信州大学で開催される。
 - ポスターのデザイン、プログラムのタイトル（副題等）や発表者の所属の示し方について、大会運営委員会に検討を依頼していることが会長から報告された。
- (3) 2006 年度第 2 回常任委員会について
- 2006 年 10 月 15 日（日）に 2006 年度第 2 回常任委員会が開催されたことが報告された。審議内容は後の〔審議事項〕と重複するため報告は省略された。
- (4) 各種委員会の活動報告
- 編集委員会
2006 年 7 月 28 日に編集委員会が開かれ、質の高い論文を確保する方法、及び『言語研究』の誌面と体裁について検討したことが報告された。このほか、『言語研究』の編集状況、2006 年度第 1 回委員会で承認された投稿規程と執筆要項の英語版を作成し学会ホームページに掲載したこと、及び『言語研究』第 132 号から第 136 号の偶数号で特集を組むことが報告された。
 - 大会運営委員会
2006 年 9 月 10 日に第 133 回大会の発表要旨審査を行なったことが報告された。また、2006 年 11 月 19 日に臨時の大会運営委員会を開催し、第 134 回大会のワークショップについて、大会の宣伝の方法について、ポスターのデザインについて、プログラムでの発表者の所属の示し方について等を検討する予定であることが報告された。
 - 広報委員会
科学技術振興機構のアーカイブ化対象誌に『言語研究』が採用されたことを受けて、アーカイブ対象誌の論文などの著作権の委譲をどう扱うかを検討したこと、及び第 133 回大会のプログラムを 9 月にホームページに公開したことが報告された。
 - 「危機言語」小委員会
第 133 回大会のシンポジウムは、司会を「危機言語」小委員会の委員が務めるなど、小委員会からの支援協力のあったことが報告された。さらに、2006 年 11 月 19 日に「危機言語」小委員会が開催される旨、第 134 回大会でワークショップを開催する予定である旨、『言語研究』第 134 号で組まれる「危機言語」特集に「危機言語」小委員会として企画に参

加する予定である旨、及び三修社から出版物を出す予定である旨が報告された。また、委員長補佐に佐々木冠氏が推薦され承認された。

・夏期講座小委員会

夏期講座小委員会の体制を入れ替えた旨が委員長より伝えられ、委員会の承認を得た。その内容は次の通りである：委員長が荻野綱男氏から三原健一氏に交代すること、日比谷潤子氏が委員を退くこと、橋本喜代太氏が新委員として加わること。なお橋本氏には、2008年度に京都で開催される次回夏期講座の実行委員長を依頼する。また、2006年度夏期講座の決算報告が実行委員長の風間伸次郎氏よりあった。

(5) その他

佐藤昭裕氏より、日本学術会議言語・文学委員会についての報告があった。言語学会に対してアンケート回答の依頼があった場合や、言語学会会員に対してシンポジウム開催に関する協力要請があった場合には、協力して頂きたい旨の依頼があった。

[審議事項]

(1) (独) 科学技術振興機構 (JST) のアーカイブ化への参加について

- ・審議に先立ち、広報委員長から JST の事業およびアーカイブ化に関するヒアリングについての説明があった。
- ・審議の結果、アーカイブ化事業に参加することが承認された。また、アクセス制限を設けないこと、及びアーカイブ化の対象とする記事を「論文」「フォーラム」「書評論文」「書評・紹介」に限ることが承認された。

(2) 著作物取り扱い規程について

- ・「日本言語学会著作物取り扱い規程」案が提出された。審議の結果、原案第 8 項を一部修正することを除き、原案通り承認された。修正することになったのは次の部分である。原案第 8 項「学会が、自らあるいは第三者を通じて、『言語研究』に掲載された著作物を新たに編纂される論文集に収録し刊行する場合は、第 6 項に示された条件に加え、事前に著者の承諾を得なければならない。」の下線部分を「…事前に著者に通知することとする。」と修正する。[別記 1 参照]。
- ・「著作物取り扱い規程」の周知方法について審議した。その結果、ホームページに記載する、大会の会長挨拶で言及する、文書で通知する等の方法で周知し、2 月末日まで異議を受けつけ、異議申し出のなかった分について公開することになった。

(3) 『言語研究』執筆要項改訂について

編集委員長から執筆要項改訂案が提出され、原案通り承認された。改訂

内容は、これまで邦文論文には欧文要旨を、欧文論文には邦文要旨を添えていたのを、邦文論文・欧文論文とも、邦文と欧文の両方の要旨をつけるようにした点、及びこれまで申し込み時に求めていた要旨の提出を、論文の採用が決定した後でもよいとした点である。[別記2参照]。

(4) 『言語研究』の体裁について

『言語研究』の体裁を変更することが編集委員長及び事務局長より提案された。審議の結果、これまでA5判であった判型をやや大きめの変型判(横156mm縦234mm)にすること、新しい表紙デザインをデザイナーに依頼して作成することが承認された。また、表紙の具体的なデザイン、『言語研究』の「研」の字の書体、文字のデザイン等に関しては、編集委員会と常任委員会に一任することが承認された。

[別記1] 日本言語学会著作物取り扱い規程

(目的)

1. 本規程は、『言語研究』に掲載される論文等の著作物(以下、著作物と言う)に関して、著者と日本言語学会(以下、学会と言う)の双方にとって不都合が生じないように、取り扱いを定めるものである。

(学会による複製権・公衆送信権の行使の許諾)

2. 『言語研究』に掲載された論文等著作物のうち、著者が明示されている著作物の国内外における複製権および公衆送信権(以下、複製権等と言う)の行使は、著者から学会のみに許諾される。著者が明示されていない著作物の国内外における複製権等は、すべて学会に帰属する。著者は、著作物を『言語研究』に投稿した時点で本規程を了承したものとし、著作物の複製あるいはインターネット等による著作物の公開(以下、著作物の複製等と言う)を行う場合は、本規程に従うものとする。

(配布先が限定されている複製等)

3. 『言語研究』に掲載された著作物は、教育・研究の目的であることが明確であり、かつ配布先が授業の受講者、研究会の聴衆、研究グループ、研究助成機関・団体など特定の者に限定される場合は、複製等を行う者が当該著作物の著者であるかどうかに関係なく、出典を明示することを条件に、学会への通知なしに複製等を行い、利用することができる。

(著者が複製等を行う条件)

4. 著者が、自らあるいは第三者を通じて、自らの著作物について著作物の複製等を行う場合は、第3項に示されている場合を除き、事前に学会に通知するとともに、著作物の出典として、学会名称、『言語研究』誌名、当該号・ページに言及し、著作物の原典が印刷刊行された『言語研究』に掲載されているものであることを明記しなければならない。著作物の複製等において誤植・誤記の訂正や加筆などを行った場合は、その旨を明記しなければならない。複製等により著者に支払われる対価について、学会は許諾された複製権等を理由に権利を主張してはならない。

(著者が論文集への再録を行う条件)

5. 著者は、第4項の条件を満たしていれば、自らあるいは第三者を通じて、『言語研究』に掲載された著作物を新たに編纂される論文集に収録し刊行することができる。また、これにより著者に支払われる対価について、学会は許諾された複製権等を理由に権利を主張してはならない。

(学会が複製等を行う条件)

6. 学会が、自らあるいは第三者を通じて、著作物の複製等を行う場合は、著者を含む学会会員に広く利益をもたらすものでなければならない。また、著作物の複製等を行うことについて委員会の承認を得なければならない。

(複製等による学会への収入)

7. 著作物の複製等により第三者より学会に対価が支払われた場合は、学会の収入とする。

(学会が論文集への再録を行う条件)

8. 学会が、自らあるいは第三者を通じて、『言語研究』に掲載された著作物を新たに編纂される論文集に収録し刊行する場合は、第6項に示された条件に加え、事前に著者に通知することとする。

(著者が第三者の著作権を侵害した場合)

9. 第三者の申し出等により『言語研究』に掲載された著作物が第三者の著作権を侵害していることが明らかになった場合、すべての責任は著者が負うものとする。

(本規程制定以前の著作物)

10. 本規程制定以前の著作物についても、学会は本規程に従って取り扱うことができるものとする。ただし、本規程制定以前に『言語研究』に掲載された著作物の著者から異議の申し立てがあった場合は、双方に不利益が及ばないための解決を協議するものとする。

(2006年11月18日委員会決定)

〔別記2〕『言語研究』執筆要項の改訂

(旧)

- 3 提出部数ならびに様式：**
- a. [中略]
- b. [中略]
- c. 原稿は、以下の順序、体裁で整える。表紙を除き、論文本体、注、参考文献、要旨の総てのページに通し番号をつける。[中略]
- 欧文または邦文要旨 邦文論文には欧文要旨(20行以内)を添える。欧文論文には日本語要旨(400字以内)を添える。(原稿の段階ではタイトルと要旨のみで、執筆者名、所属機関名は書かない)。

(新)

- 3 提出部数ならびに様式：**
- a. [中略]
- b. [中略]
- c. 原稿は、以下の順序、体裁で整える。表紙を除き、論文本体、注、参考文献、要旨の総てのページに通し番号をつける。[中略]
- 要旨 邦文論文・欧文論文とも、日本語(400字以内)と欧文(20行以内)の両方の要旨を付ける。ただし、要旨は論文の採用が決定してから提出してもよい。

2006年度第1回「危機言語」小委員会

日 時：2006年6月16日(金)

場 所：東京大学法文2号館多分野交流演習室

出席者：上野善道(会長)、林 徹(事務局長)、呉人 恵、坂本比奈子、佐々木冠、笹間史子、白井聡子、白石英才、田村すゞ子、角田太作、中山俊秀、渡辺 己

〔議事と報告〕

(1) 委員の選出について

上野善道新会長が議長となり、継続委員、退任委員の確認、新委員の選

出をおこなった。その結果、委員の構成メンバーについては、以下のとおりとなった。

- 1) 継続委員：梅田博之，遠藤史，金子亨，呉人恵，坂本比奈子，佐々木冠，笹間史子，白井聡子，田村すゞ子，千葉庄寿，角田太作，中山俊秀，稗田乃，宮岡伯人，村崎恭子，渡辺己（16名）
 - 2) 退任委員：奥田統己，風間伸次郎，梶茂樹（3名）
 - 3) 新委員：宮本律子，白石英才（2名）
- (2) 委員長等の選出について
委員の互選により，呉人恵氏が新委員長に選出された。また監事には笹間史子氏が選出された。なお，委員長補佐については調整中。
- (3) 委員の役割分担の見直しについて
委員の役割分担の見直しがおこなわれ，ワークショップ（坂本，佐々木），特別展示（遠藤），『言語研究』（村崎），夏期講座（田村），広報（千葉，渡辺，白井），シンポジウム（金子），国際交流（角田，稗田）などの役割が決定された。
- (4) 今後の活動計画について
従来どおり，特別展示，ワークショップ，シンポジウムの3本立ての活動を進めていくことが合意され，特別展示は2007年，2008年の秋，ワークショップは2007年，2008年の春，シンポジウムは2008年度末におこなうことが決定された。

このうち，2007年春に予定されたワークショップでは，活格構造を取り上げ，典型的な活格言語や，活格か否かに議論がある言語を紹介しながら，活格とはなにかを，能格や主格・対格との比較対照もおこないながら明らかにするという趣旨でおこなうことで合意された。

2006年度第2回「危機言語」小委員会

日 時：2006年11月19日（日）9:30～12:30

場 所：札幌学院大学商学部 A-315 教室

出席者：遠藤 史，呉人 恵，坂本比奈子，佐々木冠，笹間史子，白井聡子，白石英才，田村すゞ子，千葉庄寿，角田太作，中山俊秀，宮岡伯人，村崎恭子，渡辺 己

[議事と報告]

(1) 委員長補佐について

前回の2006年度第1回小委員会より懸案となっていた委員長補佐については，佐々木冠氏（札幌学院大学）に引き受けていただくことで同意

を得た。なお、監事は笹間史子氏で変更はない。

- (2) 2007年度日本言語学会春季大会(第134回大会)におけるワークショップについて
 コーディネーターの佐々木冠氏より準備状況の報告がなされるとともに、企画案が提案され、概ね出席委員の合意を得た。これを受けて、応募締め切りに向けての今後のスケジュール調整について話し合われた。なお、ワークショップのタイトルは「活格性とはなにか?—フィールドからみえてくる言語の多様性 Part 2」に決定した。また、これまで予定されていた発表者(児島康宏、堀博文、金子亨、松本泰丈の各氏)に加え、本小委員会委員の角田太作氏にイントロダクションをお願いすることで同意を得た。
- (3) 2007年度日本言語学会秋季大会(第135回大会)における特別展示の準備に向けて
 各委員が発表者を推薦し、特別展示担当の遠藤史氏がとりまとめをおこなうことで合意された。
- (4) 『言語研究』第134号における「危機言語」特集について
 『言語研究』編集委員の角田太作氏から特集についての経緯報告があり、特集の組み立て方などについての審議がなされた。これを踏まえて委員長がまず原案を作り、早急に小委員会委員に諮ることで合意を得た。2007年中にはすべての完全原稿が揃うように具体的な準備を進めていくことが決定された。
- (5) 「危機言語」に関する書籍出版について
 千葉庄寿氏より、三修社から提案のあった危機言語小委員会監修『世界危機言語データブック(仮題)』の出版についての経緯報告がなされた。これに対し、委員からは出版の意義はあるが、一般書であり研究書以上に編集作業が大変になることが予想される、出版社との分業について明確にする必要がある、書籍の内容について詳しい企画を立てる必要があるなどの意見が出された。その結果、早急に結論を出すのではなく、次回の小委員会までに出版社と話し合いながら、企画を練っていく必要ありということで合意された。

2006年度夏期講座小委員会報告

日本言語学会第5回夏期講座に関して、実行委員長の風間伸次郎氏から以下の報告があった。

- (1) 2006年8月21日(月)から26日(土)の6日間、東京大学教養学部(目黒区)を会場にして夏期講座を実施した。

- (2) 受講者は221名であった。その他に、講師12名、実行委員5名、アルバイト15名、小委員5名などが参加した。
- (3) 参加費を中心とする収入5,155,773円に対して、講師謝礼、宿泊費、印刷費、アルバイト費、会場費などの支出は4,268,346円となり、約90万円の黒字になった。

2008年度は、京都で第6回の夏期講座を開催する予定である。開催の詳細は現在検討中である。

第 133 回大会

期 日 2006 年 11 月 18 日 (土)・11 月 19 日 (日)

会 場 札幌学院大学

第 1 日 (11 月 18 日)

開会挨拶および公開特別企画

開会の辞 上野善道

開催校挨拶 布施晶子

特別講演「環太平洋言語圏の輪郭—一人称代名詞からの検証—」 松本克己

シンポジウム

「ソ連邦崩壊と日本語学—北東アジアにおける

20 年間のフィールドワークの歩み—」 司会 白石英才

イテリメン語(チュクチ・カムチャツカ諸語)の概要 講演者 小野智香子

極東にいろいろいるぜ ツングース諸語 風間伸次郎

アルタイの仲をとりもつモンゴル諸語 山越康裕

北東アジアのチュルク諸語研究 藤代節

—日本からそそぐ北東アジアへの眼差し—

第 2 日 (11 月 19 日)

口頭発表・ポスター発表

○ A 会場

(A 1) 10:00 ~ 構音障害における音韻的有標性—閉鎖音と摩擦音の場合— 竹安大

(A 2) 10:35 ~ Focus Particles with Direct Objects in Miyako Dialect of Ryukyuan コロスコワ ユリア

(A 3) 11:10 ~ Dephrasing in Kobayashi Japanese: Is it a Reality? 五十嵐陽介

(A 4) 12:40 ~ 樺太アイヌ語における複数を表す人称接辞 -(a)hci について 村崎恭子

(A 5) 13:15 ~ 言語類型論的観点から見たアイヌ語の充当 (Ainu Applicatives in Typological Perspective) ブガエワ アンナ

(A 6) 14:00 ~ A Statistical Analysis of the Nominative/Genitive Alternation in Modern Korean: A Preliminary Study 牧秀樹
Shin Ki-Sang
坪内一也

(A 7) 14:35 ~ 満洲語文語の因由節 山崎雅人

(A 8) 15:10 ~ ハムニガン・モンゴル語とハムニガン・ 山越康裕

エヴェンキ語の所有構造に見られる言語
接触の影響

。 B 会場

- (B 1) 10:00 ~ ハンガリー語の副詞的分詞の表現における 江口清子
意味的制約
- (B 2) 10:35 ~ フォーカス・トピックと対照—ハンガリー 倉橋 農
語の場合—
- (B 3) 11:10 ~ 属性記述文にあらわれる付加詞の生起条件 神戸 百合香
—語用論的観点からの一考察—
- (B 4) 12:40 ~ Evidence for the Existence of 矢田部 修一
Non-constituent Focus
- (B 5) 13:15 ~ Positive Polarity as a Syntactic Phenomenon 郷路 拓也
- (B 6) 14:00 ~ 虚構移動に表される日本語の複合動詞 大崎 梓
- (B 7) 14:35 ~ もう一つの日本語存在文 西川 賢哉
- (B 8) 15:10 ~ 「てくる」構文における起動のアスペクトに 澤田 淳
ついて—認知言語学的アプローチ—

。 C 会場

- (C 1) 10:00 ~ The Syntax of Subject Honorifics in Japanese 新沼 史和
牧 秀樹
- (C 2) 10:35 ~ NP 内での敬語化と NP 削除 瀧田 健介
- (C 3) 11:10 ~ Constraints and Functions of 大川 裕也
the *There*-construction
- (C 4) 12:40 ~ 日本語児による束縛変項の解釈—動詞句削 伊藤 益代
除文の点から—
- (C 5) 13:15 ~ 日本語の主語は動詞句内部に留まる場合が 小泉 政利
ある—行動実験からの証拠— 玉岡 賀津雄
- (C 6) 14:00 ~ A Minimalist Perspective on Focus 三好 暢博
Sensitive Operators and its Theoretical 星 浩司
Implications
- (C 7) 14:35 ~ On the Classification and Analysis Roger Martin
of Control
- (C 8) 15:10 ~ PF-Crash Repair and the Vacuous 小町 将之
Movement Hypothesis

。 D 会場

- (D 1) 10:00 ~ パラウク語の名詞化にかかわる 2 つの形式 山田 敦士
- (D 2) 10:35 ~ サオ語 (台湾中部) における可能表現 新居田 純野

- (D 3) 11:10 ~ グルジア語における従属節の構造と語用論 児島 康 宏
- (D 4) 12:40 ~ The Limits of *Say Verbs* Grammaticalization Guy Kaul
in Adioukrou
- (D 5) 13:15 ~ 広東語における「主題表示としての
モーダル助詞」の意味機能について 孔 寶 儀
- E 会場
- (E 1) 10:00 ~ 韓国ソウル方言のアクセント 孫 在 賢
- (E 2) 10:35 ~ 韓国の山清方言のアクセント体系 姜 英 淑
- (E 3) 11:10 ~ A Laboratory-phonological Study of
Surface Tone Patterns in Daegu Korean:
An Interim Report 宇 都 木 昭
張 惠 辰
薛 慇 瑛
- (E 4) 12:40 ~ 日本語の動詞由来複合語におけるアクセントと連濁について 高 野 京 子
- (E 5) 13:15 ~ 今帰仁方言の名詞アクセント—『沖繩今帰
仁方言辞典』の再分析— 小 川 晋 史
- (E 6) 14:00 ~ 日本語における英語借入語の促音化 加 藤 幸 子
- (E 7) 14:35 ~ Nasal Demorification and Proper Licensing
in Cilungu 那須川 訓也
- (E 8) 15:10 ~ カドリ語の語中破裂音 稲 垣 和 也
- F 会場
- (F 1) 10:00 ~ 事象の測度としての結果述語 田 中 英 理
- (F 2) 10:35 ~ イベントと関係を持つ数量詞の統語と意味 佐 藤 香 織
- (F 3) 11:10 ~ What is Quantized in Japanese? 水口 志乃扶
- (F 4) 12:40 ~ Way 構文における移動の意味—動詞と名詞
のクオリア構造の融合— 境 倫 代
- (F 5) 13:15 ~ 英語の動詞由来複合名詞—内項主語の複合
について— 長 野 明 子
- (F 6) 14:00 ~ 不変化詞 *up, over, through* が示す完了の意
味間の質的な差異について 滝 本 幸 世
- (F 7) 14:35 ~ 比較接頭辞 *out-* の意味論と尺度表現の存在
論 蔵 藤 健 雄

ポスター発表 11:40 ~ 13:40

◦ G 会場

- fMRI によるかき混ぜ文の処理に関する研 生 田 奈 穂
究—刺激呈示モダリティに依存しない脳 金 情 浩

活動の特定一	小 泉 政 利 佐 藤 滋 堀 江 薫 川 島 隆 太
統計的手法に基づく韓国語副詞「jal」の一 考察	李 在 鎬 井 佐 原 均
幼児の単文理解における文脈情報の利用可 能性と作動記憶	水 本 豪
間接的な「申し出」表現一意図性知覚の観 点から一	吉 成 祐 子

◇退 会

国内通常会員： 10名
 国内団体会員： 1名
 国内学生会員： 4名



◇ 本誌は、独立行政法人日本学術振興会平成 18 年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の交付を得て刊行されたものである。

* * * * *

編集委員会からのお知らせ

編集委員長 影山太郎

(1) 2006 年度中の投稿および審査状況

	論文	フォーラム	書評論文	書評・紹介	合計
投稿数	31	10	0	2	43
採 用	7	4	0	2	13
不採用	12	2	0	0	14
改訂中	6	2	0	0	8
審査中	6	2	0	0	8

(2) 本誌のリニューアル

昨年から会長、事務局、編集委員会、常任委員会が協力して、『言語研究』の表紙、判型、論文印刷面を一新する方向で検討を続けてきました。次の 132 号から新しい装いの『言語研究』をお届けしますので、ご期待ください。